

## セキュリティ確保とアカウント統合

大分大学(旧)と大分医科大学は2003年に統合され、大分大学として現在に至っている。組織の再編に伴い、それぞれの情報基盤も全面的な統合されることになった。

### 大分大学の情報基盤

組織改変により、旦野原の本学キャンパス「情報基盤センター」と、狭間キャンパス「医学情報センター」の2拠点間におけるネットワークが整備された。これと同時に、学生、教職員のアカウントは統合され共用サービスも開始されている。アカウントの一元管理、共用サービスの整備を実現することにより、情報基盤整備のコスト低減、各種管理業務の省力化を図ると共に、情報セキュリティ面でのリスク管理が徹底して行われている。

### 潜在するリスクと対策

アカウント統合以前から質の高い情報セキュリティマネジメントが求められていた。医学情報センターでは学内の情報リソースと病院情報を総合的に管理運用しているためである。着々と進められた情報基盤の整備は、異なるシステムやサービスの混在する複雑な学内ネットワークのアカウントを統合し今日に至っている。

### 厳格なアクセス管理

アカウント統合により、様々なセキュリティマネジメントが実施されている。学内ネットワークにアクセスする機器(サーバ、PC、周辺機器等)はすべてアカウント情報と連動して稼働している。『アカウントマスター forLDAP』にMACアドレス(機器固有の番号)を事前登録し、厳格なアクセス制限を行なうことでセキュリティを確保するというものだ。

### アカウントと入室管理

アクセス管理の観点からアカウントと連動した入室管理システムも導入されている。ICカード、非接触認証装置に対応した携帯電話やスマートフォンにより、学生の入室を管理するこのシステムは、対象となる部屋に入室することで学習システムの認証が実施され、室内のPCが使用可能な状態になるというものだ。従来、学生に開放するPCは設置した部屋自体の開放時間を管理したり、使用者を特定するためのシステムを別途用意したりするなど手間とコストが必要だったが、この入室管理システムを導入することで、学生のIDそのものが入室の鍵となり、同時にシステムの鍵にもなる。使用状況は逐一ログとして残るため、万一不正な行為が行われたとしても追跡が容易であり、総合的な管理体制を構築することが可能となった。

### 事業者から好評

これら情報基盤の整備は、富士通株式会社九州支社が事業者として構築したものである。『アカウントマスター forLDAP』は既存のネットワークに対する親和性の高さが評価され、アカウント統合の中核的なシステムとして組み込まれている。

『アカウントマスター forLDAP』の日常的な管理業務はWEBブラウザでのみの操作となるため、管理作業の効率化が図られ、管理担当部門、管理者の負担を大幅に低減することが可能となるのも同社に高く評価された点である。

#### DATA (2011年5月)

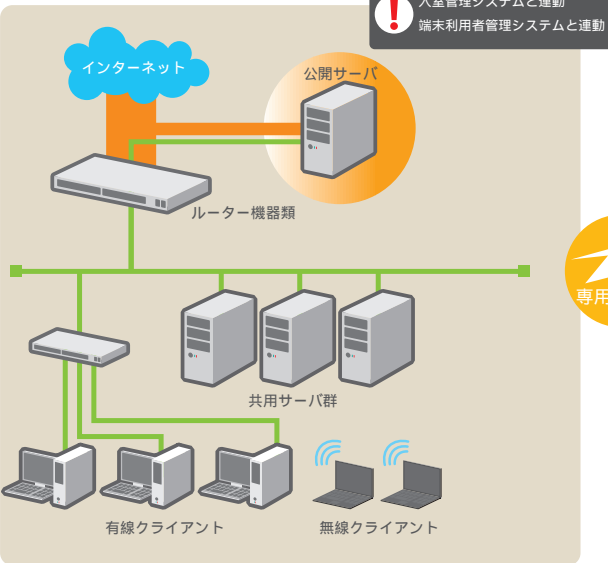
学部数: 4学部

学生数: 5,770人

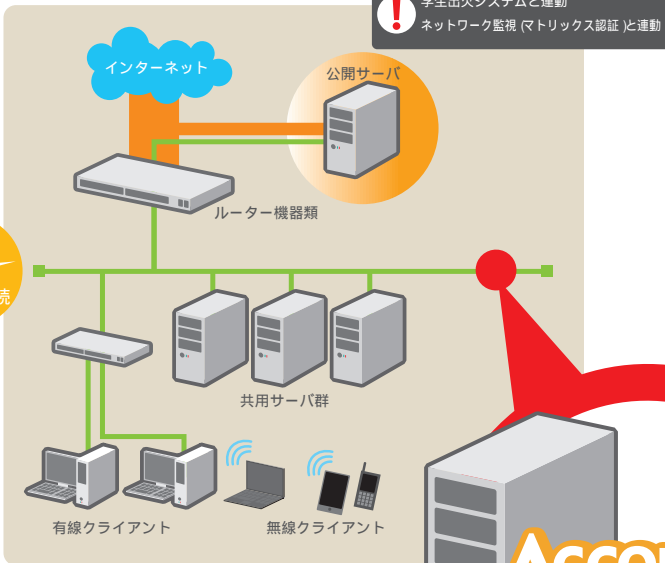
キャンパス数: 3

S事業者: 富士通株式会社九州支社

### 旦野原キャンパス



### 狭間キャンパス



『アカウントマスター forLDAP』には、両キャンパスのすべてのアカウント情報が登録されています。ネットワーク内の各種サービスに認証機能を提供しています。また、ネットワークに接続される機器のMACアドレスもすべて『アカウントマスター forLDAP』に登録されていて、厳格なセキュリティを提供しています。アカウントの更新、削除などのメンテナンスは『アカウントマスター forLDAP』内の情報をWEBブラウザで書き換えるだけで実施できます。

